

茅ヶ崎セントラルクリニック 南野 朋子

功 績	ご本人の人生の支援、ご家族に安心感を提供出来た事
推 薦 者	井上 和幸
推 薦 理 由	健育会グループの職員として使命感に基づき、クリニック理念を自ら実践した行動力に対して、理事長賞に推薦します。

内 容

A氏は糖尿病性腎症から腎不全、糖尿病が悪化し網膜症となり失明しました。失明に関しては、徐々に進行したのではなく、突然発症し、37歳にして仕事と視界を一気に失いました。本人の精神面での落胆、また家族は将来への不安とA氏の介護で疲れきっていても、職員による送迎が必要な為、中々透析先が決まらない中での紹介でした

稼働率が伸び悩んでいる中、欲しい患者さんではありましたが、当クリニックもギリギリの人員であったため、送迎をするために人手を割く事は大変厳しい状況でした。南野さんより看護部長に多数の患者さんがいる大病院ならまだしも、固定され気心知れた患者さんばかりで業務内容が固まっているとの理由から、「送迎が必要なら私が迎えに行きますよ。30分のスケジュールを調整すればどうにかかりますよ。」と申し出てくれました。

クリニックでの透析が始まり、全盲という事もあり、予め障害物や転倒の危険性が少ないベッドに配置しましたが、若い本人の精神面のサポートに一番力を入れました。

本人の不安感を和らげる為、送り迎えの際の何気ない会話やベッドの身の回りのお世話の際に積極的な声掛けを続け、またすべてに介助するのではなく、自立心を持っていただく為、自分でできる事は自分でする方針は崩さず、何かあれば南野さんが叱咤激励もしました。

当初みられた不安や落胆も徐々にみられなくなり、お迎え時に元気にあいさつが出来るようになるなど、ご家族からも「これからどうしようかと思っていたところ、本人も現実を前向きに捉えはじめ、喋り方や生活に変化が見え始めました。私たちも精神的にきつかったですが、負担もへり、心の余裕が生まれました」とお話しいただき、心から安心されていると感じました。

もちろん看護助手を始め様々な職種の方の協力もあってのことですが、南野さんを中心とした看護助手の職員が業務を見直し、効率化を図った事が、未来のある若い患者さんと支えるご家族のこれから待っている生き生きとした人生を支援するお手伝いが出来たと思えました。

茅ヶ崎市立病院の医師からも、「困ったときは茅ヶ崎セントラルクリニックですね。何とかしてくれるから安心してお任せできます。」とのお言葉を報告会の中で頂きました。